

## 宝山寺の宗教的境内分析と獅子閣に関する考察

建築デザイン研究室 A97T439 矢本宏

### 1. 研究の背景

日本では、明治期、洋風諸技術の受容に伴い、西洋風の建物が、全国に建てられた。中でも特に在来技術者である大工棟梁により、「みようみまね」で建てられた建築は、擬洋風建築と一般に呼ばれている。擬洋風建築は、尾山神社神門をはじめとする伝統的歴史を持つ、宗教施設にまで建設されるようになった。そこで、本稿では明治15年(1882)の建設以来、大きな改修の行われず、創建当初の姿を残す生駒山宝山寺獅子閣の調査、研究を同研究室在籍の田中昭臣君とおこなった。宝山寺は創建以来、民間信仰、現世利益など大衆的な信仰の特徴を持ち、水商売の神として、大阪近郊の人々に親しまれている寺で、近世文書、境内絵図などの資料が豊富に残されている。



獅子閣外観



尾山神社神門

### 2. 研究の目的

獅子閣に関する既往の研究としては、福田晴虔、西和夫が行っているが、いずれも、建物単体としての評価である。そこで、今回の研究では近世以降の文書を読解し、伽藍配置の復元分析を行い、当建築が寺院という宗教空間においてどのような性格の場所に建てられたのか、獅子閣と宗教、獅子閣と他の宗教建築との有機的な関連の考察を行う事が目的である。

### 3. 復元図による伽藍配置の分析

・境内の分析

聖天堂移動前1805年(図1)

ア. 本堂の本尊不動明王と弥勒菩薩像は、ともに大日如来の化身という本地の関係であり、不動明王の指示によって、弥勒菩薩の安置場所が決定されている。

それによって構成される軸は南門を向いており、当時あったと考えられる大坂道からの参拝者を意識した構成を取っている。

イ. 本堂、聖天堂、虚空蔵堂は一直線に配置され、また、それぞれの正面は同方向を向き南面し、軸線を構成している。本堂の不動明王、聖天堂の歡喜天は一般に現世利益の神であることは有名であり、虚空蔵院の虚空像菩薩について、「(不動)明王指南」の結果、「先地ヲ開キ」「極重悪人(中略)虚空蔵菩薩八件乃郡類ヲモ洩スコトナク救護セム」という記述が残されていることから、場所は、不動明王によって決定、仏の性格は、現世利益の大衆的な仏である。このことから、この軸線は宝山寺の宗教的な特徴である大衆性をより強調したものである。

山岳寺院という立地条件に制約ある場所ではあるが、それぞれの二つの軸線は、ともに参拝客、民衆に対する意図を多く含んだ密度の高い宗教空間を構成している。

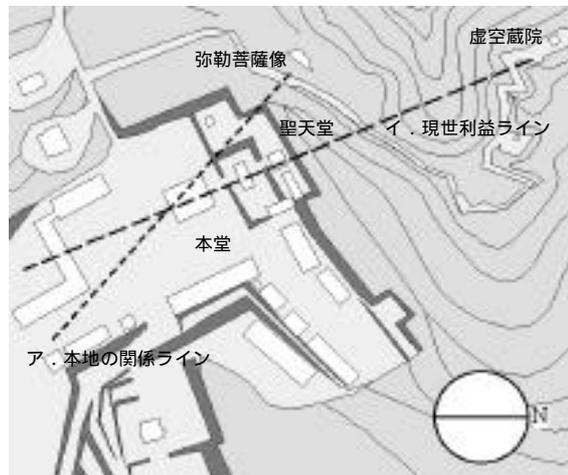


図 宗教的軸線

聖天堂移動後1805年

聖天堂移動は、拝殿を併設するためのスペース確保のためと考えられるが、移動後、本堂と並列するようになり、イの軸線は崩れるものの、民衆と積極的に関係を持つ歡喜天の信仰が盛んになる時代を反映したもので、いずれにせよ、宝山寺の大衆的な宗教的性質を示している。



図2 宗教的空間と私的空間

#### ・獅子閣の敷地について

獅子閣は明治31年(1888)の「宝山寺縁起」では、東洋美術史家フェノロサによって「其ノ精妙ヲナルヲ賛美」した事を伝え、懸造り部分を「構造美麗」として、当時の人が懸造りを美的なものとして評価していることが解る。そのような参拝者の目をひくようなデザインから宝山寺の看板、宣伝の役割を果たしていた事を示しており、その性質は、歡喜天信仰に見られるような民衆と積極的な関係をもつものである。

以上のような性格をもつ獅子閣が建つ理由には、その敷地の宗教的意味合いの希薄さがあげられる。というのも、本堂の東北の敷地は、当初より、宗教的な役割を持った建物は少なく、前述の本堂などのある宗教空間とは著しいコントラストをもっていた。唯一の宗教建築であった愛染院も「南妙軒(二間・五間半)」「愛染院(二間・三間半)」と記され、梁行きが両方2間であることと1802年の絵図には、南妙軒の名前があるが、愛染院は描かれていない事から、愛染院寮舎である南妙軒と同じ軒であったと考えられる。つまり、仏殿として単独で存在していたわけではなかった。その愛染院も南妙軒、ともども文久3年(1863)の火災により焼失、以後、建替はなされていないことから、宝山寺における、重要性は比較的少なかったと考えられる。以降、唯一の宗教建築であった愛染院もなくなり、ますます、宗教的意味合いは薄くなり、客寮、経蔵、庫裡などの寺の私的な空間として使用されている。

明治31年(1898)に宝山寺は境内の風水鑑定を行っており、獅子閣の位置を鬼門であると指摘している。獅子閣はそれより16年前に建てられているが、この土地は以前、獅子閣の前身、花の寮と花の寮の前身と考えられる南妙軒が建っていたが、南妙軒は火災、花の寮は「大

破」などの被害を受けている。また、風水鑑定の敷地図では、獅子閣東北をあけて建設され、倉と獅子閣によって東北方向へいけなないようにして塞いでいる。江戸の東北は日常生活と違う異質な吉原を鬼門封じとして計画されたと考えられていることから、獅子閣も度重なる被害に対して、鬼門封じの役割を帯びて、洋風の意匠をもつ奇妙な建物を計画した可能性がある。また、鑑定の依頼人の名前として、当時の住職の他に、獅子閣を建設した前任職乗空和尚の名がある事から、獅子閣という西洋の文脈を含んだ建物を寺に計画したのを気にかけていた事を示唆するものとも考えられる。以上から論ずるに、獅子閣の建設された敷地は宗教空間から切り離された、いわば、「はなれ」の空間であった。

宝山寺で見られた「はなれ」的な要素は、他の宗教施設の擬洋風建築においてもみることができる。尾山神社においては、それは灯台の機能を持つ門であり、光尊寺では説教所、法泉寺では集会所、興福寺六角堂は本尊移動まへの仮遷座の場所として、擬洋風建築が建設されるようになった。それらに共通するのは、伝統的宗教建築群における周辺施設としての擬洋風建築であったといえる。

#### 結論

すでに述べたように、獅子閣の建設された敷地は宗教空間から切り離された、「はなれ」の空間であった。このような宗教的空間と私的空間との相互関係から類推できるのは、獅子閣のような非宗教的要素を、宝山寺における総合的な伽藍配置にも反映させることによって、むしろ大衆との積極的な関係が保ちえたであろうことである。

獅子閣における大衆性の所在が明らかにされねばならない所以である。

#### 謝辞

宝山寺資料室長の築部章三氏、元興寺文化財研究所の吉井敏行氏には、資料調査、歴史的知見など色々とお助けをいただき、大変お世話になった。記して謝意とする。

- 1 「(不動)明王指示、遷齋勸慈尊、安于窟内」(生駒 山寶山寺縁起第二、「寶山湛海傳記史料集成」R7所収)
- 2 大坂道については、田中昭臣「宝山寺絵図と宝山寺文書による境内分析と獅子閣に関する考察」を参照
- 3 生駒山寶山寺縁起第二、「寶山湛海傳記史料集成」R7所収
- 4 「宝山寺界縁起 明治2年(1888年1月)」記載、宝山寺所蔵
- 5 前任職新田義圓氏「宝山寺年表」宝山寺所蔵
- 6 樋口一純筆「生駒山寶山寺境内之図」宝山寺所蔵
- 7 客寮建替二付御願書「明治5年奈良県行政文書寺院願伺届」所収、奈良県立図書館所蔵
- 8 目崎茂和「図説 風水学」P193参照